

『素問病機氣宜保命集』の成立について —元明期医書引用からの考察—

三鬼 丈知

【抄録】

『素問病機氣宜保命集』（以下『保命集』と略称）は金代の医家劉完素の著作とされるが、李自珍が『本草綱目』の中で、張元素の著作であると主張してから、この書の著者問題が起こった。しかし現存の『保命集』には劉完素と張元素の医学知識が入り混じっていることは疑いない。そこで、著者がいずれかにこだわるのではなく、『保命集』はどのように形成・発展したのかを、元明期の複数の医学書に引用された記述を元に考察した。また李自珍の主張も、さまざまな書物の比較のもとに為されたものであることを考察した。『医籍考』では、李自珍が『保命集』の著者を張元素としたのは、元素の子張璧の『保命集論類要』と混同したためだと推察している。しかしこの説は成り立たないことも分かった。

I. はじめに

『素問病機氣宜保命集』（以下『保命集』と略称）には、この書の成立が大定26年、即ち1186年であることを記した、金代の医家劉完素の自序が残されている。

しかし、後に明代の医家李自珍が『本草綱目』（1596年刊）の中で、『保命集』は金代の医家張元素の著作であると主張し、劉完素自序も後人が偽撰したものだとして断定した。この説は『四庫全書』（1782年完成）にも採用され、一定の権威を得た。しかしさらに後、日本の多紀元胤が『医籍考』（1831年序刊）において、李自珍の説には根拠がなく、やはり『保命集』は劉完素の著書だと反駁する。これ以降現代に到るまで、『保命集』の著者について数多くの論考が生み出されている。

『保命集』の著者に関する問題については、劉、張のいずれか一方に決定することは困難である。というのも、現存する『保命集』には、間違いなく両者の学説が混在しているとみられるからである。本稿では、『保命集』と関連書籍との比較、後世の引用の状況について調査することで、『保命集』の成立過程について考察した。

II. 劉完素と張元素及び『保命集』の版本について

ここでは、まず『保命集』の著者とされる劉完素と張元素との関係を確認し、また、

『保命集』の版本について整理しておきたい。

劉完素は『金史』に伝が立てられてはいるが、生卒年は明らかではない。いくつか説があるが、『保命集』の自序に記される年号などから推して1126年から1132年の間に出生し、1200年から1234年までの間に卒したものと考えられている。¹

張元素、字は潔古についても『金史』に伝があるが、生卒年ははっきりしない。しかし劉完素の晩年に二人が交流を持ったことを示す有名な逸話があり、そのことから考えて張元素は劉完素よりいくらか年下だったであろうと考えられている。

その逸話は、張元素の側から伝えられたものであり、『医学啓源』張建（字は吉甫）序文の記述が最も詳しい。この序文は、張元素の弟子の李杲（字は明之、号は東垣）が張建に依頼したものであること、また『医学啓源』は、張元素の著書のうち壬辰の変の戦火を免れて唯一伝わったものであることが、序文中に記されている。この序文の記述から、『医学啓源』は1200年頃には成立し、張建序文が書かれ、初めて刊行されたのは1244年以降のことであろうと推定されている²。いま、張建序文の記述に基づき、『金史』（卷一百三十一、列伝第六十九、方伎、張元素）及び明代の李廉（1488-1566年）の『医史』（卷五、第十二から十三葉）に見える記述も参考にしつつ、劉完素と張元素が交流したという逸話の概略を現代語に訳して記しておく。

劉完素は既に医学で名を成していたが、張元素のことを蔑ろにしていた。ある日、劉完素は八日にわたって傷寒を病み、頭痛がして緊脈となり、吐き気がして食事がとれなくなった。門人が看病していたが、為すすべが無くなって張元素に診療を依頼した。張元素が到着しても、劉完素は壁の方を向いたまま一顧だにしない。そこで張元素は、「どうしてこんなにも私をぞんざいに扱うのですか」と言った。そして劉完素の脈を診ると「脈状はしかじか、初めに某薬を服用して、某薬味を用いましたか」と言った。劉完素は「その通りだ」と答えた。張元素は「間違いも甚だしい」と言った。劉完素は「何を言うか」とにわかに起き上がった。張元素は、「その薬味は、寒性で下降するので、太陰に走って陽気が亡われ、汗を出すことができないのです。今脈証はこのようなになっていますから、某薬を服用すべきです。」と述べた。劉完素は初めて彼の能力に感服し、言われたとおりの薬を一服したところたちまち病は癒えた。この時から、張元素の医名は天下に顕れるようになった³。

劉、張二人のその後の交遊について、ここでは触れられていないが、おそらく何らかの交流が続いたであろう。

張元素の弟子には李東垣、王好古、羅天益らがあり、後世この系譜に連なる学派は、元

素の郷里易水の名を冠して易水学派とよばれる。それに対して劉完素は河間学派の祖とされる。これら易水・河間という学派については、明代になってからの論争を経て成立したものであり、両学派が当時から激しく対立したかのような偏見に惑わされてはならないと、石田秀実氏は注意喚起をしている⁴。本稿では便宜上張元素とその弟子たちの著書、学説などを指して易水学派、対して劉完素について河間学派と呼ぶばあいがあるが、もちろん両者の対立を強調するものではない。

対立よりもむしろ、両者の医学の交渉について確認しておかねばならない。例えば、張元素は自著『医学啓源』の中に、劉完素の『素問玄機原病式』の内容を取り込んでいる⁵。また金末から元代にかけての時代は、前代までに生まれた新理論や、さまざまな医家の長所を採用し、折衷統合しようとする動きが医学の主流となり、劉完素・張元素両家の説にもとづいた『医学会同』という書までも著されたという⁶。

劉完素と張元素との医学は、彼らの生前からお互いに影響を与え合うものであり、さらに、その後の時代の風気も、それぞれの医学知識の折衷統合を促すものであったという事実を確認しておくことは、現存する『保命集』の成立を考える上でも重要である。

次に明代までに出版された、『保命集』の版本を整理しておくこと以下の通り。

- A) 楊威刊本（佚）：1251年初刊（大定丙午26（1186）年の守真自序有り）
- B) 宣德本：宣德辛亥6（1431）年、臞仙（寧王朱権）刊、懷德堂刻本（中国科学院図書館、中医研究院図書館、上海図書館、国立公文書館など所蔵）
- C) 成化本：成化14（1478）年、黃明善刊（『経籍訪古志』著録）
- D) 金陵本：万暦13年乙酉（1585年）、金陵呉諫刻本（『劉河間傷寒三書』所収、南京図書館蔵）
- E) 医統本：万暦29（1601）年、呉勉学校『古今医統正脈全書』本
- F) 王錢本：万暦39（1611）年、王来賢、錢楷等刻本（中国科学院図書館蔵）

現存する中で最も古いB) 宣德本は、寧王朱権により出版されたものである。

A) 楊威刊本が存在したことは、B) 宣德本に収録された楊威の序文によってのみ知ることができる。そして、B) 宣德本の朱権序文に「大鹵楊政亨謂えらく天下の宝、当に天下と之を共にし、私するべからず。乃ち諸を梓に^{きざ}鋟む。古板は兵燹^{へいせん}に毀たれて存せざること久し。世に其の伝わること無し」と言うことから、A) 楊威刊本の版本は刊行後早い時期に兵火のために失われていたことが知られる⁷。

楊威序文には、「然るに先生序有りて、己の行蔵を序して言えらく、幼年已に『直格』、『宣明』、『原病式』三書有りと。義は精慤なりと雖も、猶お聖理を尽くさざる処有るがご

とし。今是の書也^{また}復出でて、前の三書と相い表裏を為さば、日後の医者^のの龜鏡にあらざるか。」⁸、劉完素自序についての言及がある⁹。このことから、A) 楊威刊本刊行時には同時に劉完素自序も収載されていたと考えられる。

しかし、李時珍は劉完素自序、及びB) 宣徳本の冒頭に添えられた「玉連環詞」は偽撰であるとする。さらに、『保命集』は一名『活法機要』ともいい、張元素の手に成るものだと主張したのである。ここに『保命集』の著者問題が端を発する。次章では、李自珍の主張と、多紀氏の反論、それにまつわる諸研究について見ていくことにしたい。

Ⅲ．『保命集』著者混乱の経緯及び諸研究

『保命集』の劉完素自序には、その成立についての記述がある。三十年間をかけ、誠実且つ実地に研究して真理を明らかにした治法方論を「三卷、三十二論」に編成し、これに『素問病機氣宜保命集』と名付けた、と語られる。また、「心髓を得て、之を^{きようし}篋笥に秘し、敢えて軽がるしく以て人に示さず。」として、この書は当初秘匿されたことが述べられている。しかし、それは仁人の心を絶とうというのではなく、この書は聖人の法を述べるものなのだから、後の世の適格者に自ずと伝わるはずだ、と締めくくられている¹⁰。

その秘匿された書を「発見」して世に広めたのが、A) 本を出版した楊威ということになろう。楊威序文には、『保命集』発見の経緯と、その構成について以下のように説明されている。

天興の末、予北渡し、東原の長清に寓す。一日、前太医王慶先の家に^{よぎ}過り、几案の間に於いて一書を得たり。曰く『素問病機氣宜保命集』と。試みに之を問えば、乃ち劉高尚守真先生の遺書稿なり。其の文は則ち内經中自り出で、其の要を^{ひろ}撫いて之を述ぶるものなり。朱塗墨注し、凡そ三卷、三十二門に分ち、門に資次有り、理に合し經に契す。¹¹

楊威は、天興の末年、即ち金朝滅亡の1234年に前の太医王慶先の家において、机下に『素問病機氣宜保命集』と題する書を発見し、それが劉高尚守真先生の遺稿であることを知ったと言う。また、その書は「三卷、三十二門」という構成であったという。これは、劉完素自序に「三卷、三十二論」に編成したと言っていたのと同じく、楊威が発見した『保命集』が現存の『保命集』と同様の構成であったことを示すものである。さらに楊威序文はこの後に続けて、『保命集』巻上の「察色論」以外の八篇の篇名とその内容について記述する。また、さらにその後に続けて、「後の二十三論は論に随って証を出し、証に随って方を出し」と言っており、後半の二十三篇は医論と処方からなっていたことを記

す。これは現存の『保命集』巻中、巻下の内容と合致するものである。楊威が発見した段階で、『保命集』の構成と内容は、現存のものとはほぼ同じであったことが分かる。

また、楊威は『保命集』を出版する意図について、次のように記している。

惜しいかな先生卒し、書は世に伝わらず、先生の道をして、窃かに小人の口に入らしめ、以て己が書と為す者これ有り。予先生の道ぼうし けいきよく荊棘へいえい中に屏翳するを憫れむ。故に存心精較し、今数年なり。工に命じて版を鑿り、世に広めて伝えんと擬し、先生の道をして、荊棘中より出さしめ、亦世の膏肓の一端を起こさしめん。歲辛亥正月望日¹²

当時この書が出版されなかったのをよいことに、本来劉完素先生の述べた医学の道を、我が物として吹聴する小人がいたのだと、楊威は言うのである。そして彼は、この書を出版することで、そうした状況を打ち破り、深い藪に埋もれてしまった劉完素の道を世に出し、世の中の難病の一端を治療することを期したのだという。

これら劉完素自序、楊威序文からみれば、『保命集』は劉完素によって著されたものであり、現在のものと構成も同様であったと考えられる。しかし、この序文が記された1251年から300年以上の時を隔てて、李時珍が『保命集』の著者について異論を提出するのである。次に李自珍の主張について見ていこう。

1. 李時珍の説—『保命集』の著者は張元素

『本草綱目』巻一上、序例上、歴代諸家本草の『潔古珍珠囊』の説明に、以下のよう言う。

又、『病機氣宜保命集』四巻を著す。一名『活法機要』。後人誤りて河間劉完素の著す所と作し、序文詞を偽撰し、巻首に調し、以て之に附会す¹³。

後人が劉完素の著書と誤認し、自序と詞を偽撰したと主張するのである。ただし、後に多紀元胤もいうとおり、その根拠となるものは何ら示されない。なぜ李自珍はこのような主張したのであろうか。

趙大震氏がすでに指摘するところだが、『本草綱目』の中には劉完素の説として「七方十剂」に関する引用が見られる。そして、この内容は『保命集』から引用したものと考えられる¹⁴。さらに、『本草綱目』中には、劉完素の著作として『保命集』を引用する例が複数みられる。これらのことから、『本草綱目』編纂当初は、李自珍自身も劉完素が『保

命集』の著者と考えていたことが疑われる。『本草綱目』編纂の過程で、諸書の記述について調査するうちに、『保命集』は実は張元素の著書であり、別名を『活法機要』というのだと確信するようになった可能性が高い。この点について詳しくは、第Ⅴ章で検討する。

李自珍の説が出された後、『四庫全書』が『本草綱目』の説に従って、劉完素の自序を偽撰として削除し、張元素の著作として『保命集』を収録している。『四庫全書総目提要』（以下『四庫提要』と略す）には次のように言う。

其の書初めは伝播すること罕にして、金末楊威始めて其の本を得て之を刊行し、而して題して河間劉完素の著す所と為す。明初寧王権重刊し、亦其の誤に沿いて、並びに完素の序文詞を偽撰し、巻首に調して、以て之に附会す。李時珍の『本草綱目』を作るに至って、始めて其の謬を糾し、而して定めて元素の手より出づると為し、序例中に於いて、之を辨ずること甚だ明らかなり¹⁵。

これは全く李自珍の説に沿うものである。『本草綱目』では偽作者は明示されていなかったが、『四庫提要』では、まず楊威が劉完素の著書と誤認し、寧王朱権がその間違いを踏襲した上に劉完素自序と「王連環詞」とを偽作したと断定している。

さらに李廉の『医史』の逸話を根拠にして、張元素は造詣も深く、すでに自ら一家を成していたのだから、劉完素の名に托して箔をつける必要などともと無いと言い、「今特に改正を為し、其の偽托の序、亦並びに刪削に従う」として劉完素自序が削除された経緯を記している¹⁶。『四庫提要』は、劉完素の名は楊威が権威づけを行うために持ち出したと考えるようである。それはともかく、張元素が著者であるという根拠は、ここでも李自珍の説以外には示されていない。

2. 多紀元胤の反論—『保命集』の著者は劉完素

多紀元胤は『医籍考』の中で、李時珍『本草綱目』、『四庫提要』の説に、いくつかの根拠を示しながら反駁し、『保命集』はやはり劉完素の著作だとしている。その主張は以下の通りである。

按ずるに線溪野老（ママ）劉守真『三消論』跋に云へらく、麻徵君汴梁に寓するの日、先生の後裔を尋ねて、其の家に就き、『三消論』『氣宜病機』の書を得たり。又杜思敬『濟生按粹』に、「東垣『活法機要』と、『潔古家珍』、及び劉守真『保命』とは、大同小異なり」と称す。考うるに徵君とは則ち麻九疇、張子和の友為り、乃ち当

時に在りて、其の言此の若し、楊序に、「先生卒し、書は世に伝わらず、茆茨荆棘中に屏翳す」と謂う所のものと符す。杜思敬の書を編むは、元延祐二年（1315年）に在り、時に八十一歳、其の生は守真の時を距たること、未だ遼闊と為さず、則ち是の書の守真自り出づるは、断じて知る可し。且つ其の述ぶる所の方論、『宣明論』、『原病式』と相い出入す。李時珍は何の証する所有りて、以て張元素の書と為すや。夫れ元素の著す所は、佚して見るべからずと雖も、東垣李明之嘗て従いて其の法を受くれば、則ち明之の諸書を読み、以て源委を溯れば、其の理趣判然として、是の書と同じからず。元素の子璧、著するに『保命集論類要』有り、時珍豈に此を以て相い混ずるものに非ずや。提要未だ此の義を察せず、随いて其の謬りを襲い、並びに序文詞を以て、寧王の偽撰と称するは、郢書燕説、此より甚だしきは莫し。『活法機要』、李明之の著す所為り、時珍又只是の書の一名とは、実に歧誤為り¹⁷。

『医籍考』が反論の根拠とするのは次の三点である。

(1) 『三消論』跋の記述

『三消論』の錦溪野老による跋文に、麻九疇が劉完素の後裔から書物を得た記述があることを指摘する。『三消論』は劉完素の作と考えられているが、現在は『儒門事親』中に収録されている。『儒門事親』は、張從正の著作である。張從正は、劉完素と同じく所謂金元四大家として名を挙げられる医家で、麻九疇はその友人である。『三消論』跋文によれば、麻九疇が汴梁（現在の開封）に仮住まいしていたとき、劉完素の後裔を訪ねて、その家と近づきになり、『三消論』と『氣宜病機』との二書を得たのだという。これは、『保命集』について楊威が「先生卒し、書は世に伝わらず」、「茆茨荆棘中に屏翳す」と述べる状況と符合しているという。つまり、この麻九疇の得た『氣宜病機』こそが、世に伝わっていなかった『保命集』に違いないと考えるのである。

(2) 『濟生拔粹』の記述

『濟生拔粹』に、「劉守真の保命」という記述があり、劉完素に「保命」という著作があったことが示されている。『濟生拔粹』は、『脾胃論』、『医壘元戎』、『衛生宝鑑』など所謂易水学派の医学書をあつめた一種の医学叢書である。そこに収める『活法機要』に「東垣の活法機要是、潔古の家珍、及び劉守真の保命と、大同小異なり」と称する、と『医籍考』は言う。多紀元胤は、杜思敬が『濟生拔粹』を編んだのが延祐二年（1315年）、八十一歳の時であり、劉完素の生きた時代と遙かな時を隔てるわけではないから、劉完素の著書と考えて間違いない、と論じる。また、『保命集』の方論は、ほかの劉完素の著作とは通じるところがある。しかし、弟子の李杲を通して張元素の医学について考察すると、その医学理論は『保命集』とは異なっているのが判明すると述べている。つまり、劉

完素の時代からさほど隔たらない時代に、『保命集』という書物が劉完素の著書と認定されており、その内容も劉完素の医論により近いものだから、『保命集』はやはり劉完素の著作に違いないというのである。

(3) 張璧『保命集論類要』との混同

張元素の子、張璧（号は雲岐子）に『保命集論類要』という著作がある¹⁸。劉完素の『保命集』と書名が似ているので、李自珍はこの書と『保命集』とを混同したに違いないと、『医籍考』では推測している。

以上の点をふまえ、序文を寧王の偽撰と称するのは、「郢書燕説」即ち根本を取り違えて誤りを伝えるものだと、この李自珍の誤りを踏襲した『四庫提要』の説に対しても批判を加えている。そして、東垣の『活法機要』というのだから、『活法機要』は張元素ではなく李杲の著作であり、これを『保命集』と同一書とするのも李自珍の誤りであると指摘している。

上記(3)については、今回の調査によると、『医籍考』の推測は成り立たないようである。おそらく李自珍は『雲岐子保命集』は『保命集』とは別の書として明確に区別して認識していたらしい。このことは、第V章で『玉機微義』と『本草綱目』との『保命集』引用について検討することで明らかになる。

(1) については『医籍考』の記述にやや乱れがある。『医籍考』では、麻九疇が得た書を「『三消論』、『氣宜病機』之書」としていたが、『儒門事親』所収の跋文では「『三消論』、『氣宜』、『病機』三書」となっている。そしてまた『医籍考』の『三消論』についての項を見ると、「『三消論』、『氣宜病機』二書」としているのである¹⁹。傅再希は、これを『医籍考』が「前人の語句を勝手に改めて、自説を補強しようとするもので、全く忠実な治学の態度ではない」として、厳しく非難する²⁰。しかし、これは伝写の誤りの可能性が高いであろう。いずれにせよ、本稿では、世に知られない劉完素の著書があったことが問題となるので、『氣宜病機』が一書であれ、二書であれ大きな問題ではない。『三消論』跋文には、これら劉完素遺稿は「文多く全からず」といっており、現行『保命集』とはかなり違ったものだったようである。『保命集』上巻に「氣宜」、「病機」という名の二篇を収める。傅再希が指摘するように、あるいはこれらの篇と関連する残存稿だった可能性もある²¹。

(2) の『濟生拔粹』との関係については、次の第四章で詳しく比較する。傅再希は、劉完素と杜思敬との歳が近いとは言えないと主張し、A) 楊威刊本から六十余年経っているので、『濟生拔粹』は楊威の説を踏襲しただけで、『保命集』の著者が劉完素だったという証拠にはならないという²²。しかし、杜思敬が、易水学派の医書を集めた叢書を編纂するに当たって、そこに収めた医書と大同小異の書物に対して、わざわざ劉完素の『保命』と

言及することは重要な意味があると筆者は考える。杜思敬は A) 楊威刊本が刊行された 1251 年には 17 歳になっていたはずであり、十分な判断力を備えていたと考えられる。その後どの段階で杜思敬が A) 楊威刊本を知ったかは分からないが、少なくとも彼は『活法機要』、『潔古家珍』と大同小異の『保命集』が劉完素の著作として世に行われていることに対して、何ら違和感を抱いていなかったということが分かるからである。

『医籍考』の主張から、劉完素が著者と確定することは難しいが、劉完素には秘匿された書があったであろうということ、また、A) 楊威刊本は易水学派の系譜に連なる杜思敬においても、劉完素の『保命集』という書物として認識されていたであろうことは確認することができる。

3. その他の先行研究について

『保命集』が劉完素、張元素いずれの著作であるかという問題については、その後もいくつもの研究が為されている。それらを大きく分ければ『医籍考』の説に同意するものと、反論するものとなるが、いずれにせよ『保命集』には易水学派の医学知識が混ざっているという結論にならざるをえない²³。

『保命集』の中・下巻には、劉完素と張元素の方論が混ざっていることは明らかである。例えば、『保命集』の中巻、瀉痢論には「『珍珠囊中』有」と、易水学派の他書『珍珠囊』を引用する記述がある。それでは、両者の説はいつ混ざり合ったのであろうか。この記述に関していえば、A) 楊威刊本刊行の後に紛れ込んだはずである。楊威は劉完素先生の道を小人が勝手に口にするのを批判し、数年の精校を経た上で『保命集』を劉完素の著として出版したというからである。

A) 楊威刊本は、早くに失われてしまったが、刊行当時の『保命集』、あるいはそのもととなったであろう書は、どのようなものであったか、次章において『済生拔粹』との比較などから考察していきたい。

Ⅳ. 『済生拔粹』の検討

ここからは、『保命集』と『活法機要』、『潔古家珍』の三者が大同小異という、杜思敬の『済生拔粹』について検討していきたい。

先述のとおり『済生拔粹』は所謂易水学派（張元素、張璧、李杲、羅天益、王好古ら）の著作を集めた医学叢書であり、1315 年成立、1341 年初刊と考えられる。『活法機要』、『潔古家珍』の二書も、『済生拔粹』の中に収録されている²⁴。

ところで、『保命集』は上・中・下の三巻からなり、上巻には医薬・診療の基礎理論が述べられ、中・下巻は諸々の疾病と、それらに用いる処方を集めたものになっている。

『済生拔粹』には、『保命集』上巻に当たる部分は見られない。杜思敬が大同小異というのは『保命集』中・下巻に当たる部分と、『活法機要』、『潔古家珍』とのことである。

『保命集』中・下巻と、『活法機要』、『潔古家珍』の二書とは体裁も同様であり、まず病証ごとに分類して篇を立て、それぞれに医論・方論を置いて病機などを解説、さらに症候に応じた方剤を列挙するという形式になっている。

三書の篇名を表にして、それらの対応を確認しておきたい。医論については、『潔古家珍』の冒頭に「方論と東垣機要内と相い同じき者は、此に復重せず、同じからざる所の者は此に附す」と断つてある。『活法機要』と『潔古家珍』の内容が重なる場合、杜思敬は「機要中に有り」などと注記した上で『潔古家珍』の方を省略したようである。但し、中には『活法機要』と『潔古家珍』が一部同じ内容を含む場合もある。それらは表の網かけによって示す。

<表1> 『保命集』と『機要』、『家珍』の篇目比較

	保命集篇目		活法機要		潔古家珍
1	中風論第十			1	風門
2	厲風論第十一	2	癘風証	3	厲風論
3	破傷風論第十二	3	破傷風証	2	破傷風
4	解利傷寒論十三			4	傷寒論
5 卷	熱論第十四	10	熱証	7	熱論
6	内傷論第十五				
7 中	瘧論第十六	9	瘧証	8	瘧論
8	吐論第十七	18	吐証	6	吐論
9	霍乱論第十八				
10	瀉痢論第十九	1	泄痢証	15	瀉痢証
11	心痛論第二十	19	心痛証		
12	欬嗽論第二十一	16	咳嗽証	5	咳嗽論
13	虚損論第二十二	17	虚損証	14	虚損証
14	消渴論第二十三	12	消渴証	11	消渴証
15	腫脹論第二十四	13	腫脹証	16	水腫証
16 卷	眼目論第二十五	11	眼証	9	眼論
17	瘡瘍論第二十六	14	瘡瘍証	12	瘡瘍論
18 下	癰癰論第二十七	15	癰癰証		
19	痔疾論二十八			13	痔疾証
20	婦人胎産論第二十九	6 胎産証 7 帶下証		17 胎産証 10 衄血証	
21	大頭論第三十	8 大頭風証 5 雷頭風証			
22	小兒斑疹論第三十一				
23	藥略				
	(以下は対応する篇無し)				
24	(素問五氣五行稽考)	4	頭風証	18	小兒四時用藥
25	(附諸吐方法)	20	疝証	19	雜方
				20	善治男子婦人及小兒

(※『活法機要』、『潔古家珍』の篇名に附した数字は本来の編次を示す)

(※『機要』、『家珍』にまたがって網掛けがあるものは、双方の医論の内容に重なる部分がある)

(※『家珍』だけに網掛けのあるものは、「機要中に有り」などとして、『家珍』の方論が省略されている)

〈表1〉の10番、瀉痢論については、『潔古家珍』と『活法機要』の内容が一部重なる。〈表1〉の14番、消渴論は『潔古家珍』と『活法機要』とで内容の大部分が重複する。一方、〈表1〉5番、熱論などは冒頭の「論曰」という引用以外は重ならず、二つの医論を合わせると、ちょうど『保命集』の医論とほぼ一致する形になっている。

熱論などを見ると、鮑氏の言うように『潔古家珍』、『活法機要』の側が『保命集』より重複しないように別々に抜き出して編集した可能性も考えられる。²⁵ しかしどこまでが杜思敬の編集による結果なのかは明らかにしがたい。今、逆に『潔古家珍』と『活法機要』を組み合わせることで『保命集』が成立したというのではなく、『済生拔粹』成立以前に三者がすでに鼎立していたことを確認しておきたい。

〈表1〉6番の内傷論などは、『潔古家珍』、『活法機要』いずれにも対応する篇が見られない。これだけでも現存二書を合わせただけでは『保命集』にはならないといえる。ところで、内傷論の内容は、後に李杲の弟子羅天益の著書『衛生宝鑑』によって引用がなされている。『衛生宝鑑』は1281年に成り、1283年に刊行されたとされる。つまり、A) 楊威刊本の後、『済生拔粹』成立の前に刊行されたものである。その書の中に『潔古家珍』、『活法機要』、『保命集』の三書全ての引用がなされている。

『衛生宝鑑』は、『保命集』について『気宜保命集』と題して二例を引用している。そのうちの一例は、瓜蒂一味を用いる「独聖散」を取り上げており、これは三書のうち『保命集』にしか収録されない処方である。『衛生宝鑑』巻七、中風門のもう一例は、「二丹丸」の処方が、『潔古家珍』のものに比べて「菖蒲」一味が多いことを注記している。つまり『衛生宝鑑』は、『保命集』と『潔古家珍』とを別の書として取り扱い、比較検討を行っているのである。

羅天益は、おそらくA) 楊威刊本を参照したと考えられる。このことから、『済生拔粹』以前に『保命集』、『潔古家珍』、『活法機要』の三種の医書がそれぞれ独立のものとして扱われていたことが分かる。また、杜思敬と同様、これら類似の三書が並び行われること自体には特に違和感を抱かなかったようである。

つぎに各書の方論の内容について、一例を取り上げて比較検討する。すると「大同小異」という三者の間で文章の順序などが入れ替わっているのが確認できる。表では『保命集』を軸にして、他書の文をそれに合わせて順序を組み替え、記号で原書本来の接続を示

してある。また、『衛生宝鑑』及び後述する『玉機微義』について対応箇所をここで併せて比較し提示しておく。

＜表2＞「咳嗽論」四書比較

1	[劉保命集]	【冒頭】	論曰、 欬 謂無痰而有声、肺氣傷而不清也。	
	[活法機要]	【冒頭】	咳、謂無痰而有声、肺氣傷而不清也、	
	[潔古家珍]		(無し)	
	[衛生宝鑑]	【冒頭】	論曰、 咳、謂無痰而有声、肺氣傷而不清也。	
2	[玉機微義]	【冒頭】①	病機機要云 欬、謂無痰而有声、肺氣傷而不清也。	
	[劉保命集]		嗽 是無声而有痰、脾湿動而為痰也。	
	[活法機要]		嗽 謂無声而有痰、脾湿動而為痰也。	
	[潔古家珍]		(無し)	
3	[衛生宝鑑]		嗽、謂無声而有痰、脾湿動而為痰也。	
	[玉機微義]		嗽、謂無声而有痰、脾湿動而為痰也。	
	[劉保命集]		欬嗽謂有痰而有声、 蓋因傷於肺氣、 動於脾湿、 欬而為嗽也。	
	[活法機要]		咳嗽是有痰而有声、 蓋因傷於肺氣而欬、動於脾湿、 因欬而為嗽也。	→(ア)
4	[潔古家珍]		(無し)	
	[衛生宝鑑]		若咳嗽 有声而有痰者。 因傷 肺氣 動於脾湿也。故咳而兼嗽者也。	
	[玉機微義]		咳嗽謂有声 有痰也。蓋因傷 肺氣 動於 湿、 因欬而有嗽也	→ A
	[劉保命集]		脾湿者、秋傷於湿、積於脾也、	
5	[活法機要]		(無し)	
	[潔古家珍]	【冒頭】	秋傷於湿、	
	[衛生宝鑑]		脾湿者。秋傷於湿、積於脾也。	
	[玉機微義]	【冒頭】②	潔古曰嗽者、秋傷於湿、積於脾。	
6	[劉保命集]		故内經曰秋傷於湿、冬必欬嗽。大抵素秋之氣宜清、 今反動之、氣必上衝而為欬、	
	[活法機要]		(無し)	
	[潔古家珍]		冬必咳嗽。大抵素秋之氣宜清而肅。 反動之、則氣必上衝而為咳、	
	[衛生宝鑑]		故 經云秋傷於湿。冬生咳嗽。大抵素秋之氣宜清而肅。若反動之、則氣必上衝而為咳嗽。	
7	[玉機微義]		經曰秋傷於湿、冬必欬嗽。大抵素秋之氣宜清而肅。 反動之、則氣必上衝而為欬嗽、	
	[劉保命集]		甚則動於脾湿、發而為痰焉。	
	[活法機要]		(無し)	
	[潔古家珍]		甚則動於脾湿、發而為痰也。	
8	[衛生宝鑑]		甚則動脾湿 而為痰也。	
	[玉機微義]		甚則動於脾湿 而為痰也。	
	[劉保命集]		是知脾無留湿、雖傷胚氣而不為痰也。	
	[活法機要]		(無し)	
9	[潔古家珍]		(無し)	
	[衛生宝鑑]		是知脾無留湿、雖傷胚氣而不為痰也。	
	[玉機微義]		是知脾無留湿、雖傷胚氣 不為痰也。	
	[劉保命集]		有痰 寒少而熱多	
10	[活法機要]		(無し)	
	[潔古家珍]		其有痰也寒少而熱多	
	[衛生宝鑑]		其有痰也寒少 熱多、各隨五臟証而治之。	
	[玉機微義]		有痰也寒少 熱多、各隨五臟 而治之。	
11	[劉保命集]		故欬嗽者、非專主於肺而為病。以胚主皮毛而司於外、故風寒先能傷之也。内經曰、五臟六腑皆能令人欬、非独胚也、各以其時主之而受病焉、非其時各伝而与之也。所病不等、寒暑燥湿風火六氣皆令人欬、唯湿病痰飲入胃留之而不行、止入於肺則為欬嗽。	
	[活法機要]		(無し)	
	[潔古家珍]		(無し)	
	[衛生宝鑑]		(無し)	
	[玉機微義]		(無し)	

		[劉保命集]		假令	湿在於心經謂之熱痰、湿在脾經謂之風痰、	
		[活法機要]		(無し)		
10		[潔古家珍]		假令湿在肝經謂之風痰、湿在	心經謂之熱痰、湿在脾經謂之風痰、	
		[衛生宝鑑]		假令湿在肝經謂之風痰、湿在	心經謂之熱痰、湿在脾經謂之風痰、	
		[玉機微義]		假令湿在肝經謂之風痰、湿在	心經謂之熱痰、湿在脾經謂之風痰、	
		[劉保命集]		湿在肺經謂之氣痰、湿在腎經謂之寒痰、	所治不同、宜随証而治之。	
		[活法機要]		(無し)		
11		[潔古家珍]		湿在肺經謂之氣痰、湿在腎經謂之寒痰、	宜随証而治之。	
		[衛生宝鑑]		湿在肺經謂之氣痰、湿在腎經謂之寒痰、	各宜随証而治之。	
		[玉機微義]		湿在肺經謂之氣痰、湿在腎經謂之寒痰、	宜随証而治之。	
		[劉保命集]		若欬而無痰者、以辛甘潤其肺、		
		[活法機要]		(無し)		
12		[潔古家珍]		咳而無痰者、以辛甘潤其肺、		
		[衛生宝鑑]		咳而無痰者、以辛甘潤其肺、		
		[玉機微義]		欬而無痰者、以辛甘潤其肺、		
		[劉保命集]		故欬嗽者、治痰為先、		
		[活法機要]	→(ア)	治欬嗽者、治痰為先、		
13		[潔古家珍]		咳而嗽者、治痰為先、		
		[衛生宝鑑]		咳而嗽者、治痰為先、		
		[玉機微義]		欬而嗽者、治痰為先、		
		[劉保命集]		治痰者、下氣為上、是以南星半夏勝其痰、	而欬嗽自愈。	
		[活法機要]		治痰者、下氣為上、是以南星半夏勝其痰、	而咳嗽自愈。	
14		[潔古家珍]		是從南星半夏勝其痰、	而咳嗽自愈也。【文末】	
		[衛生宝鑑]		故從南星半夏勝其痰、	而咳嗽自愈。	
		[玉機微義]		故以南星半夏勝其痰、	而欬嗽自愈。	
		[劉保命集]		枳殼陳皮利其氣而痰自下。		
		[活法機要]		枳殼陳皮利其氣而痰自下也。		
15		[潔古家珍]		(無し)		
		[衛生宝鑑]		(無し)		
		[玉機微義]		枳殼陳皮利其氣而痰自下	【文末】②	
		[劉保命集]		痰而能食者大承氣湯微下之、	少利為度。	
		[活法機要]		痰而能食者大承氣湯微下之		
16		[潔古家珍]	p.5 左	(如痰而能食者大承氣	微下之)【第五葉左三行目一字下げ】	
		[衛生宝鑑]		(無し)		
		[玉機微義]	→ D	痰而能食者大承氣湯微下之		
		[劉保命集]		痰而不能食者 厚朴湯治之。		
		[活法機要]		痰而不能食者、厚朴湯治之、		
17		[潔古家珍]	p.5 左	(如痰而不能食者 厚朴湯主之)	【第五葉左四行目一字下げ】	
		[衛生宝鑑]		(無し)		
		[玉機微義]		痰而不能食者 厚朴湯主之	【文末】①	→【冒頭】②
		[劉保命集]		夏月嗽而發熱者 謂之熱痰嗽、小柴胡	四兩 加石膏一兩、知母半兩用之。	
		[活法機要]		夏月嗽而發熱者、謂之熱痰嗽、小柴胡湯四兩、加石膏一兩、知母半兩用之、		
18		[潔古家珍]	p.5 左	(夏月嗽而發熱者 謂 熱 嗽、小柴胡	三兩、加石膏七分、知母三分)	
		[衛生宝鑑]		(無し)		
		[玉機微義]	→ A	夏月嗽而發熱者 謂之熱痰嗽。小柴胡	四兩、加石膏一兩、知母半兩用之。	
		[劉保命集]		冬月嗽而發寒熱 謂之寒嗽、小青龍加杏仁服之。		
		[活法機要]		冬月嗽而發寒熱、謂之寒嗽、小青龍加杏仁服之、		→(イ)
19		[潔古家珍]		(冬月嗽而發寒熱 謂之寒嗽。小青龍加杏仁)	【第五葉左、七、八行目】	
		[衛生宝鑑]		(無し)		
		[玉機微義]		冬月嗽而發寒熱 謂之寒嗽。小青龍加杏仁服之		→ B

20	[劉保命集]		然此為大例、更当随証隨時加減之、量其虛実、此治法之大体也。	
	[活法機要]	→(ウ)	此乃大例、更当隨時隨証加減之。【文末】	
	[潔古家珍]		(無し)	
	[衛生宝鑑]		(無し)	
	[玉機微義]	→ C	此乃大例、更当隨時隨証加減之	→ D
21	[劉保命集]		蜜煎生薑湯、蜜煎橘皮湯、燒生薑糊桃。此者皆治無痰而嗽者。	
	[活法機要]	→(イ)	蜜煎生薑湯、蜜煎橘皮湯、燒生薑胡椒、皆治無痰而嗽者、	→(ウ)
	[潔古家珍]		(無し)	
	[衛生宝鑑]		(無し)	
	[玉機微義]	→ B	蜜煎生薑湯 蜜煎橘皮湯 燒生薑胡椒 皆治無痰而嗽者	→ C
22	[劉保命集]		当辛甘潤其肺故也、如但使青陳皮葉、皆当去白。 本草云、陳皮味辛、理上氣、去痰氣滯塞。青皮味苦、理下氣、二味俱用、散三焦之氣也。 故聖濟云、陳皮去痰、穢不除即生痰。麻黃發汗、節不去而止汗。【文末】	
	[活法機要]		(無し)	
	[潔古家珍]		(無し)	
	[衛生宝鑑]		(無し)	
	[玉機微義]		(無し)	

細かな字句の違いの他に、『活法機要』にだけ対応箇所がない部分（〈表2〉10 から12 番）、『潔古家珍』にだけ対応箇所がない部分（〈表2〉15、21、22 番）などがあり、これは杜思敬の関与が疑われる。ただし、〈表2〉10、11 番の部分で『活法機要』に対応部分がないのはいささか問題がある。というのも、張元素の『医学啓源』に、「五痰」について引用する箇所があり、「詳しくは『活法機要』中に見ゆ」として、その説が『活法機要』の中にあると指示されており、その説について述べているのがまさにこの部分だからである²⁶。

先に述べたとおり、『医学啓源』の成立は1200 年ころ、張建序年と初刊年は1244 年以降と考えられる。すると、張元素の手になる『活法機要』という名の書が、楊威に参照された可能性もある。しかし、張建序文で、張元素の著作は『医学啓源』を除き、壬辰の変で失われたと言い、それ以前は『医方』三十巻が世に伝わっていたと言うが、『活法機要』には触れておらず、張元素に『活法機要』という著作があったかは疑わしい。杜思敬は『活法機要』を李杲の著作としていた。『医学啓源』も李杲の手によって出版されているので、その際おそらく李杲の校正を経たであろう。李杲が自著の参照を促す注を紛れ込ませた可能性も考えられる。

これはあくまで推測の域を出ない。しかしいずれにせよ、『活法機要』という書物に、もともとこの「五痰」の説は収められていたと考えられる。現行の『活法機要』にのみ見えず、『保命集』や『潔古家珍』などにはみられるので、杜思敬が『濟世拔粹』に収める際に省略したことが疑われる。だとすると、『濟生拔粹』に収載される以前には、節略されない『活法機要』の完本が存在したのであろう。

『濟生拔粹』所収の医書に、杜思敬の編集の手が加わっているのは間違いないが、それ

がどれほどのものだったのか判断するのは難しい。しかし、鮑氏の指摘によれば、『潔古家珍』は『保命集』の処方や方名を修正して整理していると考えられる²⁷。『保命集』には同名異方が非常に多いが、『潔古家珍』では重複した方名を改変して整理したとみられるのである。例えば、中風論の「愈風湯」を『潔古家珍』では「羌活愈風湯」として区別する。また破傷風論には「羌活湯」が二種あるが、『潔古家珍』ではその一方を「独活湯」とするなど整理が行われた形跡がうかがえる。また、『保命集』の咳嗽論中に二つある「玉粉丸」のうち一方を、『潔古家珍』では「姜桂丸」として、やはり別名に変更して区別したようである。

それぞれに採録された医方の数についてみると、『保命集』が253方、『活法機要』が107方、『潔古家珍』が162方を収める。これらのうち、『保命集』だけに見られる処方が81方あり、『活法機要』独自のものが20方、『潔古家珍』のみにみられる処方方は51方を数える。また、『保命集』には収録されていないが、黑白散、八味丸、和中丸の三つの処方方は、『活法機要』と『潔古家珍』とで共通した処方を収録している。ここからも、三書が共通の内容をもちながら、それぞれ独自に成立したものであることが推察される。

先ほどの医論の比較で確認したとおり、医論・方論では同内容でありながら文章の順序が組み替わっている部分もみられた。また、趙氏も指摘するところだが、『活法機要』には「頭風証」や「疝証」など『保命集』に含まれない篇もあり、『済生拔粹』では、おそらく杜思敬の手が加わっていると考えられるが、それ以前の形を留めた『潔古家珍』と『活法機要』が存在したであろうと考えられる。処方においても、それぞれに独自の処方を多数収録しており、これらは時間をかけて蓄積したであろうが、やはり三書は「大同小異」でありつつも、それぞれ別々に形成・発展したものと考えられる。

V. 『玉機微義』および『本草綱目』の検討——宣徳本出版前後の『保命集』

前章では、『済生拔粹』及び『衛生宝鑑』の引用から、杜思敬が『済生拔粹』を編纂する以前には、『保命集』、『潔古家珍』、『活法機要』という三種の書が同内容を含みつつも、それぞれ別個に伝えられてきたことを確認した。この『保命集』は楊威によって初めて刊行されたものと考えられるが、先に述べたとおりこの版は早くに失われる。この章では、『玉機微義』と『普濟方』の引用から、一度失われた後、朱権が『保命集』を復刊する前後の状況について考察する。

1. 『玉機微義』中の「病機機要」、「機要」、「病機」

『玉機微義』は明代初期に編纂された医学全書である。さまざまな病証に対する金元期の医論・方論を多数引用し、それに按語を附していくという体裁になっている。趙開美

「刻仲景全書序」（1599 年）に昨今の医家が尊崇するものとして批判的に取り上げられているが、これは却って当時本書がよく読まれていたことをも示している²⁸。日本の曲直瀬道三が愛読し、自著『啓迪集』に頻繁に引用したことも知られている²⁹。

さらにこの書に見られる引用の多くは出典が明記されるのが特徴である。既に小曾戸洋氏がこうした本書の特徴と出版時期に注目し、引用文献の索引を作成している³⁰。また、本書は成立・出版時期が、『済生拔粹』の後、朱権による B) 宣徳本刊行（1431 年）の前後（1396 年成立、1440 年初刊）に当たることもあり、今回の調査にとっても恰好の資料といえる。

まず『玉機微義』中に『保命集』の引用を探すと、6 箇所引用を見出すことができる。興味深いことにこれらは全て『保命集』ではなく、『済生拔粹』に収める『雲岐子保命集』の中でのみ対応する文を見つけることができた。

また本書にはその他に、「病機機要」、「機要」、「病機」という『保命集』或いは『活法機要』に関わりのありそうな引用が見られる。小曾戸氏がすでに「機要」と現存の『活法機要』が合わない事を指摘しているが、今回『保命集』を軸に調査したところ、ほぼ対応する文章を見出すことができた。結果を表にして示すと以下の通り。

<表 3> 『玉機微義』対応表

	玉機微義出処 (小曾戸氏索引)	書名	保命	活法機要	潔古家珍	備 考
1	卷一 (1-2a)	病機機要	○	×	×	
2	卷五 (5-2b)	病機機要	○	○	×	「東垣治痢法」
3	卷六 (6-1b)	病機機要	○	○	×	
4	卷七 (7-3a)	病機機要	○	○	×	
5	卷八 (8-3a)	病機機要	○	○	○	
6	卷九 (9-5a) * 1	病機機要	○	○	○	
7	卷十五 (15-3b) * 2	病機機要	○	○	×	
8	卷十五 (15-4b)	病機機要	○	○	×	
9	卷十九 (19-1b) * 2	病機機要	○	○	×	
10	卷三十三 (33-2a)	病機機要	○	○	×	
11	卷四十九 (49-7b)	病機機要	○	○	×	
12	卷一 (1-14a)	機要	○	×	○	
13	卷一 (1-16a)	機要	○	×	○	按己上三方（大秦朮湯、羌活愈風湯、天麻丸）東垣云調經養血安神之劑
14	卷一 (1-19a)	機要	○	△(→元戎)	△(→元戎)	風六合湯（元戎（p.263））
15	卷四 (4-20a)	機要	○	×	○	小黃丸
16	卷四 (4-22a)	機要	○	×	○	薑桂丸、『保命集』は玉粉丸、『家珍』は姜桂丸
17	卷四 (4-22a)	機要	×	×	○	玉粉丸
18	卷五 (5-3b)	機要	○	△（一部）	×	
19	卷五 (5-7b)	機要	○	△（宝鑑）	×	黄芩芍薬湯
20	卷五 (5-15b)	機要	○	○	×	防風芍薬湯
21	卷五 (5-19b)	機要	○	○	×	白朮芍薬湯
22	卷五 (5-20b)	機要	○	×	×	厚朴枳実湯
23	卷五 (5-24b)	機要	○	○	×	訶子散
24	卷六 (6-2a)	機要	○	×	×	(5-3b) と同じ箇所

25	卷六 (6-3a)	機要	?	?	?	
26	卷六 (6-3a)	機要	○	×	×	
27	卷六 (6-5b)	機要	○	○	×	白朮芍薬湯 (5-19b) に同じ
28	卷六 (6-6b)	機要	○	○	×	防風芍薬湯
29	卷六 (6-8b)	機要	○	○	×	漿水散
30	卷六 (6-11b)	機要	×	×	○	肉豆蔻丸
31	卷七 (7-8b)	機要	○	○	△ (機要)	桂枝羌活湯
32	卷七 (7-14b)	機要	○	×	×	梨蘆散
33	卷七 (7-14b)	機要	○	×	○	雄黄散
34	卷八 (8-18b)	機要	○	×	○	小黄丸 (4-20a) に同じ
35	卷八 (8-18b)	機要	×	×	○	薑桂丸 (4-22a) に同じ、但し、説明は家珍姜桂丸に同じ。
36	卷九 (9-24a)	機要	○	○	×	
37	卷十二 (12-11a)	機要	○	○	×	白朮芍薬湯 (5-19b)、(6-5b) に同じ
38	卷十三 (13-3a)	機要	○	○	△ (発明)	大秦芎湯
39	卷十五 (15-22a)	機要	△	○	×	
40	卷十五 (15-27a)	機要	○	○	△ (機要)	内疎黄連湯
41	卷十五 (15-33a)	機要	○	○	△ (機要)	内托復煎散
42	卷十九 (19-21a)	機要	○	△ (元戎)	△ (機要)	八物湯 A
43	卷十九 (19-22b)	機要	○	○	△ (機要)	牛膝丸
44	卷二十一 (21-11b)	機要	○	○	×	丹溪方と比較 (機要は黄連膏、保命は方名掲げず)
45	卷二十二 (22-12a)	機要	○	×	×	茯苓湯 (『保命集』瀉痢論第十九、茯苓湯)
46	卷二十九 (29-3b)	機要	○	○	△ (機要)	
47	卷二十九 (29-9b)	機要	×	△ (元戎)	×	四物龍胆湯
48	卷三十三 (33-5b)	機要	○	○	×	藁本湯
49	卷三十三 (33-6b)	機要	○	○	×	金鈴子散
50	卷三十四 (34-12b)	機要	○	×	×	四物湯中倍加川芎
51	卷四十三 (43-9b)	機要	○	×	○	沒葉散 (保命、沒葉散 A)
52	卷四十六 (46-4b)	機要	○	○	×	漿水散
53	卷四十九 (49-5b)	機要	○	○	△ (一部)	
54	卷四十九 (49-35a)	機要	○	○	○	半夏湯
55	卷四十九 (49-39a)	機要	○	○	○	増損柴胡湯
56	卷一 (1-5a)	病機	○	×	×	
57	卷五 (5-6a)	病機	○	△ (一部)	△ (一部)	
58	卷五 (5-7a)	病機	○	○	○	
59	卷二十一 (21-1b)	病機	○	○	○	
60	卷二十五 (25-4b)	病機	○	○	×	
61	卷二十五 (25-7b)	病機	○	○	△ (機要)	(和中) 桔梗湯
62	卷二十五 (25-8a)	病機	○	×	○	青鎮丸
63	卷二十五 (25-9a)	病機	○	×	×	荊黄湯
64	卷二十五 (25-9b)	病機	○	×	○	紫沈丸
65	卷二十五 (25-9b)	病機	○	△ (元戎)	△ (機要)	厚朴丸 (『機要』は万病紫苑丸と同じで、方は『元戎』に有りという。)
66	卷四十 (40-1b)	病機	○	○ (前半部)	○ (後半部)	
67	卷四十 (40-9a)	病機	○	○	×	二聖散
68	卷四十二 (42-1a)	病機	○	○	△ (機要)	
69	卷四十二 (42-2a)	病機	○	△ (一部)	△ (機要)	
70	卷四十二 (42-3a)	病機	○	○	△ (機要)	羌活防風湯
71	卷四十二 (42-5b)	病機	○	○	△ (機要)	羌活湯
72	卷四十二 (42-6a)	病機	○	○	△ (機要)	大芎黄湯
73	卷四十二 (42-6b)	病機	○	○	△ (機要)	白朮防風湯

※対応する箇所があるものは○、無いものは×。△は一部分が重なる場合（一部）、或いは済生抜粹所収の他書を指示する場合を表す。即ち、『元戎』は『医皇元戎』、『宝鑑』は『衛生宝鑑』、『発明』は『医学発明』、『機要』は『活法機要』を指示する。

（ ）内の英数字は小曽戸氏索引に示された巻数と頁数。

* 1は小曽戸氏索引では「病機」に分類。* 2は小曽戸氏索引には採られないもの。

合計 73 箇所の引用に対して、『保命集』中に見出せない者は 5 例あり、うち 1 例（〈表 3〉 25）は三者共に見出せなかった。1 例（〈表 3〉 47）が『活法機要』にあり、のこり 3 例（〈表 3〉 17、30、35）は『潔古家珍』にのみ見出すことができた。

これら「病機機要」、「病機」、「機要」と、現存の『保命集』、『活法機要』、『潔古家珍』三書とがどういう関係にあるのか検討してみる。

「病機機要」については、『保命集』と『活法機要』との両者によく対応する。〈表 3〉 5 は全ての書に対応箇所が見つかるが、これは前章でみた咳嗽論の部分である。ここで〈表 2〉を参照してもらうと、〈表 2〉の 4 の部分から『玉機微義』では、「潔古曰」として引用をしているのが分かる。これは『玉機微義』巻八の「論湿痰主嗽」という部分にみえるものであり、後の按語で劉純は「枳殼陳皮利其氣而痰自下」というくだりは本来潔古の言葉ではあるまいという。³¹そして、『潔古家珍』を見てみると、この部分に対応する文がない（〈表 2〉の 15 参照）。『玉機微義』は、別の箇所で『潔古家珍』という書名も何例か引用するので、この『保命集』咳嗽論と対応する「潔古曰」以下の部分は、『済生抜粹』所収の『潔古家珍』とは別の書を引用し、『潔古家珍』と比較したものと考えられる。あるいはその別の書というのが「病機機要」という名の書かもしれないが、もしそうであれば、〈表 3〉の 2 では「東垣治病法」と題して「病機機要」を引いており、『活法機要』にもよく対応するため、「病機機要」は張元素と李杲と、両者の医学思想をおさめる著作であったと考えられる。

「病機」に関しては『保命集』に全て同文が見出され、〈表 3〉 56、63 は『保命集』のみに見える例であること、〈表 3〉 65 の「厚朴丸」は『活法機要』では別名「万病紫苑丸」が提示されるが、「病機」引用ではこれに触れないなど、他の引用に比較して『保命集』と特に関係が深いものと思われる。

最も引用の多い「機要」についてはさらに『保命集』などとの関係が不明瞭である。名称から『活法機要』との対応が期待されるのだが、むしろ『潔古家珍』との関連の強さを感じさせる。〈表 3〉 30「肉豆蔻丸」や〈表 3〉 17「玉粉丸」は今の『潔古家珍』にのみ見える処方である。また、すこし紛らわしいのだが、〈表 3〉 16「薑桂丸」の方剂組成は『保命集』では「玉粉丸」という方名になっている。しかし、ここも『潔古家珍』と同じ「薑桂丸」という方名を採用している。〈表 3〉 35 も同じく「薑桂丸」を引くが、ここの記

述は『潔古家珍』のみに見られる記述である。

以上の通り、「病機機要」、「機要」、「病機」それぞれの引用と現存の類似する三書とにはある程度の対応関係が見出せるようだが、いずれかにぴったり一致するというものではなかった。しかし、この事実とは逆に『玉機微義』が成った当時、現存の『保命集』、『活法機要』、『潔古家珍』とは異なるヴァリエントが存在したことを示唆している。

前章で取り上げた「咳嗽論」にみられた「病機機要」の例などは『活法機要』、『潔古家珍』の双方の内容をカバーするような内容になっている。それでいて『保命集』とも全く一致するわけではない。具体的な比較は省略するが、例えば「機要」の引用（〈表3〉の26）と『保命集』瀉痢論や、「病機」の引用（〈表3〉の66）と『保命集』癘風論とを比較した場合でも同様の状況、つまり『保命集』の記述すべてを備えるわけではないが、『潔古家珍』と『活法機要』との両方の説を含んでいるという状況が確認できる。この事実から推せば、「病機機要」、「機要」、「病機」は、『保命集』、『潔古家珍』、『活法機要』とそれぞれ共通する記載内容がありながらも異なる本であったと考えられる。

また、最初に述べたとおり『玉機微義』が「保命集」とする引用は、『雲岐子保命集』にのみ一致した。この当時『保命集』といえば『雲岐子保命集』を指す、という状況にあったのであろう。『玉機微義』は、A) 楊威刊本『保命集』が兵火に滅んだ後、朱権がB) 宣徳本の覆刊を行うまでの狭間に成立している。『玉機微義』が『保命集』として『雲岐子保命集』だけを引用するのは、朱権の序文が言うように劉完素の『保命集』が失われ、忘れられていたことを反映しているのだと考えられる。

また、『玉機微義』巻十七には「河間曰」として、『保命集』巻下、婦人胎産論の「生地黃散」を引用している。劉完素の処方として『保命集』と同内容を引きながら『保命集』と言わない。これは、劉完素の著書としての『保命集』は失われていたが、別の書物から劉完素の処方が伝わったためにちがいない。『保命集』とは題さず、現存の『保命集』と同様の内容を含む書物、或いは「病機」、「機要」、「病機機要」と題するような異本が、『濟生拔粹』とは別の経路でも伝承されていたのであろう。

F) 王錢本に収める「王盤肖素問病機氣宜保命集序」にも「蓋し守真晩年著す所、^{ひそか} 斬惜して未だ伝えざれば、世に版本無し。惟だ好事者のみ私に相い抄録し、擅用して之を秘藏す」³² といい、劉完素晩年書が秘匿され、抄録によって伝えられていったと記されている。こうした状況があったとすれば、いくつものヴァリエントが生じていっただろう。そして抄録者はそれぞれの系譜の師の教えとして秘藏、あるいは伝承していったのではないだろうか。

2. 『本草綱目』中の「保命集」

次に『保命集』著者問題の火付け役たる『本草綱目』の『保命集』引用について考える。『本草綱目』に引用される『保命集』を拾っていくと、全部で36例見つかり、うち34例は現存の『保命集』の中に対応する箇所を見出すことができる。そして、これら36例の中には著者名を冠するものがある。表を提示しておこう。

<表4> 『本草綱目』引『保命集』表

	本草綱目	著者	劉『保命集』	『活法機要』	『潔古家珍』
1	卷九 雄黄 煮黄丸		○心痛論、煮黄丸	×	×
2	卷九 石膏		○咳嗽論、双玉散	×	×
3	卷九 無名異		○眼目論、治倒睫	×	×
4	卷九 石炭 産後児枕、黑白散	潔古	○婦人胎産論、黑白散	△別処方	△別処方
5	卷十 薑石、産後脹衝	潔古	○婦人胎産論、紫金丹	×	×
6	卷十二上 甘草		○瘡瘍論、甘礬散	×	×
7	卷十二上 桔梗、桔梗丸		○眼目論、桔梗丸	×	×
8	卷十二下 朮		○婦人胎産論、束胎丸	×	×
9	卷十二下 朮、脾湿水瀉		○瀉論、蒼朮芍薬湯、蒼朮防風湯	○蒼朮芍薬湯	×
10	卷十二下 朮、飧瀉久痢、椒朮丸		○瀉論、椒朮丸	×	×
11	卷十二下 朮、脾湿下血		△瀉論、蒼朮湯	×	×
12	卷十四 芎藭、風熱上衝	張潔古	○眼目論、川芎散	×	×
13	卷十四 假蘇、産後血眩		○婦人胎産論、荊芥散 B	×	○
14	卷十六 地黄 地黄酒、妊娠漏胎、二黄丸		○婦人胎産論、二黄丸	○二黄散	○二黄散
15	卷十六 麦門冬、衄血不止		○婦人胎産論、麦門冬飲子	○	○
16	卷十七上 大黃、相火秘結	劉河間	○熱論、大黃牽牛散	×	○牛黄散
17	卷十七上 商陸、産後腹大	潔古	○婦人胎産論、白聖散	×	×
18	卷十七上 防葵、傷寒動氣	雲岐子	×	×	×
19	卷十七上 甘遂	劉河間	○腫脹論、治腫木香散 B の後ろ	×	△水腫証 大戟散の後ろ、水腫証の末尾
20	卷十七上 藜蘆、久瘡痰多		○瘡論、藜蘆散	×	×
21	卷十七下 芫花、産後惡物		○婦人胎産論、方名無し	○当帰散	×
22	卷十八下 白斂、胎孕不下		○婦人胎産論、下胎丸	×	×
23	卷十九 沢瀉、水湿腫脹		○腫脹論、白朮散 B	×	○白朮丸
24	卷二十六 藿香、腎消飲水		○消渴論、茴香散	×	○茴香湯
25	卷三十三 葡萄、附方(新一)水腫	潔古	○腫脹論、「治水腫」	○腫脹証にあり	×
26	卷三十五下 皂莢 刺	劉守真	△癘風論、二聖散	△癘風証	×
27	卷三十六 桑、癰癰結核、文武膏		○癰癰論、文武膏	○方名無し	×
28	卷四十 水蛭、産後血暈		○婦人胎産論、沒藥散 D	○	×
29	卷四十 蛆、眼目赤睛		○眼目論、方名無し	×	×
30	卷四十一 螻蛄		○腫脹論、「治水腫」	○腫脹証にあり	×
31	卷四十二 蟾蜍、針頭散		○瘡瘍論、鍼頭散	×	×
32	卷四十二 蚯蚓		○卷末、治癰瘡方	×	×
33	卷四十四 鱖鯪		○破傷風論、蜈蚣散 B、防風湯	○	△(機要中)
34	卷四十八 鵠		○破傷風論、蜈蚣散 A	△(上の33と同じ)	△(機要中)
35	卷四十八 寒號蟲、竹籠散		○消渴論、竹籠散	×	×
36	卷四十九 鴉	雲岐子	×	×	×

潔古の名を冠する者が5例ありそのうち1例は活法機要にも見られる。これは、『本草綱目』が『保命集』即ち『活法機要』で張元素の著作だという立場であるのだから問題なかろう。

『保命集』に対応箇所が見られない2例については、雲岐子の名を冠している。そしてやはりこれは前節の『玉機微義』の場合と同様『雲岐子保命集』の中に対応する部分を見出すことができた。³³『玉機微義』の時とは異なり、『本草綱目』が編纂された時には、朱権によりB)宣徳本が劉完素の『保命集』として出版されていたため、雲岐子の名を冠して区別したのであろう。

そして、3例ではあるが劉完素『保命集』とするものも見つかった。『本草綱目』は1590年初刊とされ、朱権覆刊の『保命集』B)宣徳本を見ているはずである。とすれば劉完素を冠するものがあること自体はおかしくない。しかしそれではなぜ、『保命集』を張元素の著書だと後に断言したのだろうか。

『本草綱目』に見られるのはわずか2例とは言え、『雲岐子保命集』ははっきりと『保命集』とは違う書として認識されているようであり、『医籍考』が言うようにこれらを混同したとは考えにくい。

『本草綱目』は他に多数の書を引用しているが、それらを比較検討する内に、『保命集』の内容と易水学派の説とに共通性を見出したのではないか。一例として、『普濟方』の記述を見ておきたい。『普濟方』は明代周定王朱橚による処方集で、収録する処方数は60000余りにのぼり、1406年の初刊とされる。『本草綱目』でも『普濟方』は頻繁に引用されている。

『普濟方』の著者朱橚は、弟朱権が復刊したB)宣徳本『保命集』を見ていたと思われる。「出保命集方」などとして『保命集』中・下巻の内容を引いており、かつ出典は示さないが、『保命集』上巻の内容をも引用しているからである。「察色論第六」、「病機論第七」の内容が『普濟方』巻四に、「本草論第九」の内容が『普濟方』巻五にそれぞれ引用されている。そして、『活法機要』、『潔古家珍』の内容は、「出済生拔粹方」などとして引用している。いくつかの処方の引用について例示する。

『保命集』熱論に収録される「牛黄膏」は、牛黄（二錢半）、硃砂、鬱金、牡丹皮（各三錢）、腦子、甘草（各一錢）という六つの薬味から構成されている。『普濟方』では、薬量が多少異なるが、同じ処方を巻一百十九に載せている。ただし、「出済生拔粹方」としている。李自珍は当然、『済生拔粹』の『活法機要』と『潔古家珍』とも確認したのであろう。『活法機要』は薬量も『保命集』と全く同じである。『潔古家珍』は『活法機要』を参照するよう指示する。こうした例を見れば、『保命集』と『活法機要』の共通性を意識せざるを得ない。

また、『活法機要』虚損証に、「地黄丸」という処方が見える。蒼朮、熟地黄、乾姜の三味を用いる処方であるが、これに五味子を加えれば「腎気丸」となると記されている。『保命集』はこの「地黄丸」と同じ処方は載せず、「黒地黄丸に五味子を加うれば、名づけて腎気丸」として、乾姜を川薑に代え、五味子を加えた「腎気丸」処方だけが収載される。一方『普濟方』では、『活法機要』と全く同じ記載であるにもかかわらず、「『保命集』方より出ず」とする。こうした記述が、あるいは『保命集』と『活法機要』がもともとと同じものだったのではないかという混乱を招いたかもしれない。

さらに、前章で見た『医学啓源』中の『活法機要』についての言及が、張元素自身の記述であり、これらがいずれも張元素の著作だと判断した可能性もある。

これら、複数の事実を総合して、「『保命集』は一名『活法機要』で張元素の著作だ」という考えに至ったものと推察される。

今一度、『本草綱目』の『保命集』引用に戻って考えると、劉河間『保命集』とする3例のうち2例は方名に混乱があり、『潔古家珍』によって方名が修改されたと思われる部分である。〈表4〉の16、「相火秘結」に大黃を用いる処方は、『保命集』では「大黃牽牛散」と名づけられ、『潔古家珍』では「牛黃散」とされている。また、『保命集』全体では「木香散」は四種みられるが、〈表4〉の19については、『保命集』腫脹論の「治腫木香散」であり、これを『潔古家珍』では「大戟散」と名前を変えている。もう一例が『活法機要』とのみ重複するので断言できないが、『本草綱目』では諸書を対校するうちに『保命集』の中・下巻が易水学派の学説と同じものを含むことに気付き、本来張元素の著書である可能性を考慮し、上記の様な方名の混乱を却って河間学派の所為として処理しようとしたのではないか。つまり、もとは『潔古家珍』などに収められた処方の名前を変えて、河間学派の手によって『保命集』へ収録され、劉完素の著作とされたのだと考えたのではないか。そこで、その改編を記録する意味でこれら引用に劉完素の名前は残しておいたが、『保命集』のもともとの出处は張元素なのだと判断したのではないだろうか。

そして、もしそのように確信したなら、『保命集』に劉完素の自序が存在するのは不都合である。そこで序文は偽撰であると主張したのであろう。

結局、李時珍が何を以て『保命集』の著者を張元素としたのか、明確な根拠をみつけることはできなかったのだが、上記の様な推論を立てることができた。李自珍が諸書を比較検討したことは『保命集』著者の判断に影響したであろうし、書名の類似だけで『雲岐子保命集』と混同して張元素が『保命集』の著者であると主張したのではないことは確かである。

Ⅵ. おわりに

話が少々込み入ったところもあるので、『保命集』の成立と伝承について時系列に沿って整理しておきたい。まず、最初に紹介したとおり、劉完素は晩年に張元素と交流を持った。そして劉完素の晩年、彼の医学の神髄を記した著書が秘蔵された。これが『保命集』の祖本だと考えられる。『医籍考』に挙げる『病機』『氣宜』も、この秘匿された書と相通ずる部分がおそらくあったであろう。

この秘匿の書は出版されなかったが、抄録されて伝わったと考えられる。この際、劉完素と張元素との、それぞれの医学を継ぐ者が二人の学説を雑えつつ伝承していったのではないだろうか。この時代には、失われてしまったが『医学会同』という劉完素と張元素の医学を折衷した書が存在し、この書によって彼らの医学が南方に伝わったのだと李廉も記している。また、北方で道学教育に功のあった許衡も次のように述べて二家折衷の利を説いている。

近世の医を論ずるに、河間劉氏を主とする者有り、易州張氏を主とする者有り。…能く二家の長を用いて、二家の弊無くば、則ち治すること庶幾からんか³⁴。

このような時代の空気の中、多くの抄写が行われ、同じ方論や処方をもとめた幾種類もの異本がつくられたと考えられる。その中に「保命書」「活法機要」「病機」「機要」などと題された書があり、後の『保命集』、『活法機要』、『潔古家珍』などにつながっていったものと推察される。

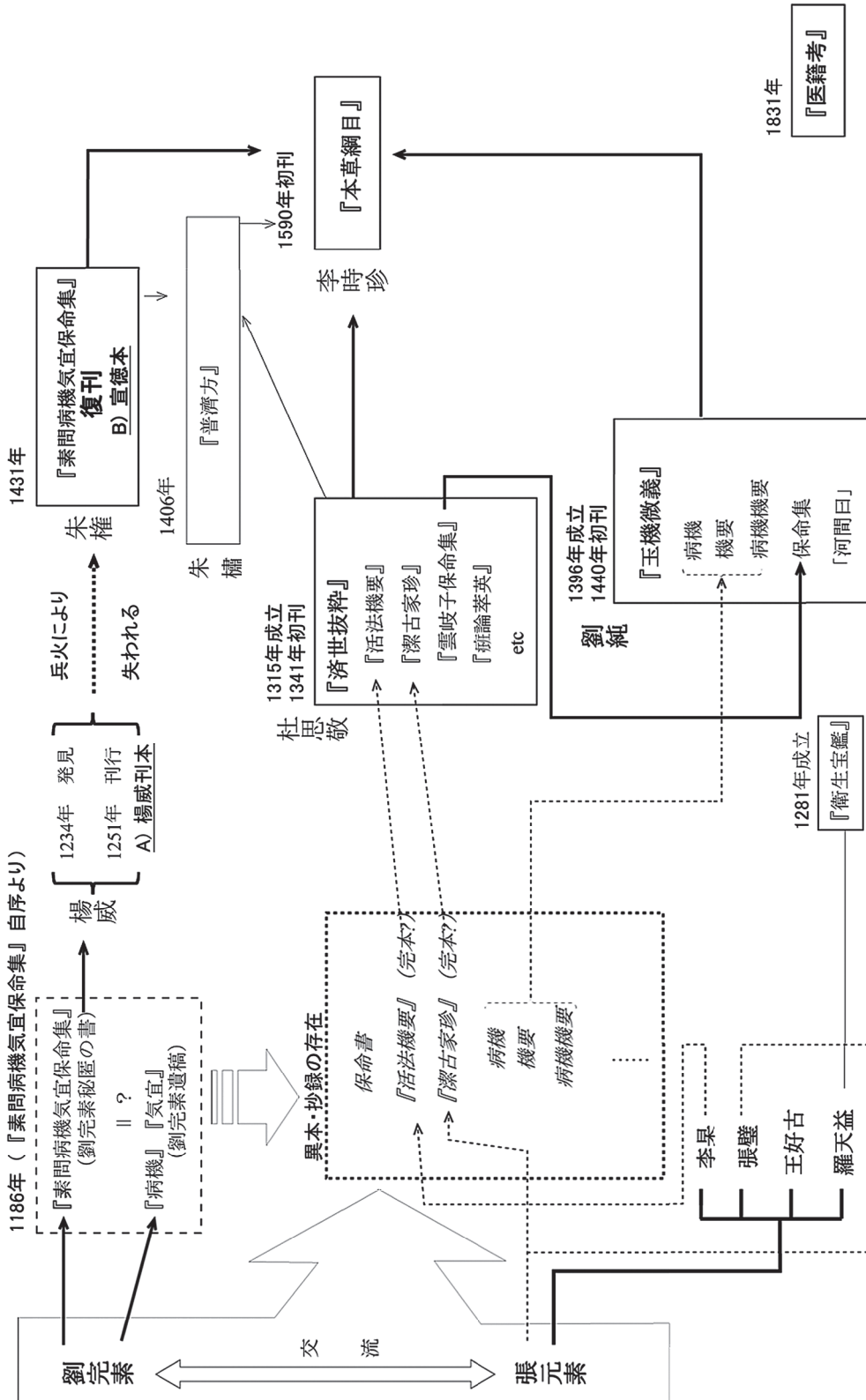
李廉や許衡よりは少し前の時代になるが、こうした状況の中で楊威は『保命集』を「発見」し、劉完素の著書として出版する。

第Ⅲ章でも触れたとおり、A) 楊威刊本の構成は序文から推して、現在の『保命集』とほぼ同様であったはずである。だとすれば傅氏もいうように、太医王慶先の几案間に潜むまでには、すでにただ河間の学説を述べる書ではなく、現存する『保命集』の如き体裁であるが、おそらく河間、易水両派相互の医説が混じり合った書になっていたと考えられる³⁵。『活法機要』や『潔古家珍』には見られない篇である、『保命集』「小兒斑疹論」が張元素並びに李杲の弟子である王好古『癰論萃英』（『濟生拔粹』所収）に「潔古老人癰論」として引用され、「内傷論」（『保命集』巻中）の内容は羅天益の『衛生宝鑑』に同文がひかれており、これらがもし、易水学派の側から『保命集』に取り込まれたもののだとしたら、楊威の言う「二十三篇」の一つになっているから、楊威刊本成立後に紛れ込んだとは考えにくいのである。とすれば、楊威刊本成立時に両派の説が既に混在していたか、あるいは王好古や羅天益が潔古の流れを汲む説として『保命集』（あるいはその祖本

か類本) からこれらを引用したかであろう。いずれにせよ、両者の混合は早い時期から始まっていた可能性があると考えられる。

楊威は劉完素の遺稿であるとの判断の下、1251年に『保命集』を刊行した。しかし、残念ながらまもなく兵火に版木が失われてしまう。『濟生拔粹』成立の頃まではまだこの書が知られていたので、その前に成立した『衛生宝鑑』への引用がみられ、『濟生拔粹』にも「劉『保命』」という記述がみられた。しかし、さらに数十年後『玉機微義』の頃になると次第にその影は薄くなり、『保命集』という書名での引用は『雲岐子保命集』のことを指すという状況になっていた。『玉機微義』成立後まもなく、朱権が改めて『保命集』を出版する。先の『珍珠囊』を引用する例などは、おそらくこの時にあらたに紛れ込んだのであろう。その後李時珍はこの書を見て、中・下巻の内容を他書と比較する中で、易水学派の説が含まれることと、河間学派の関与とを読み取り、『保命集』は張元素の著書だと主張するにいたったと考えられる。

【図1】



(Endnotes)

- 1 真柳誠（1988）『素問玄機原病式』『黄帝素問宣明論』解題（『和刻漢籍医書集成』第2輯）、東京：エンタプライズ。
- 2 真柳誠・小曾戸洋（1989）「漢方古典文献解説・26—金代の医薬書（その2）」、『現代東洋医学』10巻4号、pp.105-112。
- 3 「河間劉守真医名貫世、視之蔑如也。異日守真病傷寒八日誤下証、頭疼脈緊、嘔惡不食、門人侍病、未知所為、請潔古診之、至則守真面壁不顧也。潔古曰、〔何〕視我直如此卑也。診其脈、（謂）之曰、脈病尔乃、初〔服〕某藥犯某味藥乎。曰、然。潔古曰、差之甚也。守真遽然起曰、何謂也。曰、某藥味寒、下降、走太陰、陽亡、汗不徹故也。今脈〔如此〕、当以某藥〔服〕之。守真首〔懇〕大服其能、一服而癒、自是名滿天下。…（中略）…暇日輯（集）『素問』五運六氣、『内經』治要、『本草』藥性、名曰『医学啓源』、以教門生、及有『医方』三十卷伝於世。〔壬辰遺失、□□□存者惟『医学啓源』〕。真定李明之、門下高弟也、請余為序、故書之。蘭泉老人張吉甫〔序〕。」任応秋校注（1978）『医学啓源』、張序、北京：人民衛生出版社、pp.1-2。
- 4 石田秀実（1992）『中国医学思想史』、東京大学出版会、pp.269-271。
- 5 山田慶兒（2002）『氣の自然像』、岩波書店、p.200 注（88）；三鬼丈知（2013）「火極まれば水に似る—『素問玄機原病式』と運氣論医学」、三浦國雄編『術の思想 医・長生・呪・交霊・風水』、風響社、pp.101-102。
- 6 注4前掲書、pp.269-270。
- 7 「大鹵楊政亨謂天下之宝、当與天下共之、不可私也、乃鋟諸梓。古板毀於兵燹、不存久矣。世無其伝。」朱權「重刻保命集序」（孫治熙編校（1998）『素問病機氣宜保命集』（『河間医集』）、北京：人民衛生出版社、p.389）孫治熙編校（1998）は、「大鹵焉政亨」に作る。今鮑曉東校注（1998）『素問病機氣宜保命集』、中医古籍出版社、p.13 によって改める。
- 8 後注11、楊威「素問病機氣宜保命集序」下線部参照。（孫治熙編校（1998）、p.386）
- 9 劉完素自序には「僕見如斯、首述『玄機』、刊行於世者、已有『宣明』等三書。革庸病之鄙陋、正俗論之舛訛、宣揚古聖之法則、普救後人之命。」と言い、『素問玄機原病式』、『宣明論方』に加えてもう一書、合わせて三書が『保命集』執筆以前に刊行されていたことを記している。（『保命集』劉完素自序（孫治熙編校（1998）、p.383））
- 10 「今將余三十年間、信如心手、親用若神、遠取諸物、近取諸身、比物立象、直明真理、治法方論、裁成三卷、三十二論、目之曰素問病機氣宜保命集、此集非崖略之說、蓋得軒岐要妙之旨、故用之可以濟人命、舍之無以活人生、得乎心髓、秘之篋笥、不敢

輕以示人、非絶仁人之心、蓋聖人之法、不過当人、未易授爾、彼之明者、当自伝焉。時大定丙午閏七月中元日、河間劉完素守真述。」『保命集』劉完素自序（孫洽熙編校（1998）、pp.383-4）

- 11 「天興末、予北渡、寓東源之長清。一日過前太医王慶先家、於几案間得一書、曰『素問病機氣宜保命集』。試問之、乃劉高尚守真先生之遺書藁也。其文則出自『内經』中、摭其要而述之者。朱塗墨注、凡三卷、分三十二門、門有資次、合理契經。如原道則本性命之源、論脈則尽死生之說、攝生則語存神存氣之理、陰陽則講抱元守一之妙、病機則終始有條有例、治病之法、尽於此矣、本草則驅用有佐有使、処方之法、尽於此矣、至於解傷寒、論氣宜、說曲尽前聖意。讀之使人廓然有醒悟、恍然有所發明、使六脈十二經、五藏、六腑、三焦、四肢、目前可得而推見也。後二十三論、隨論出証、隨証出方、先後加減、用藥次第、悉皆蘊奧、精妙入神、嘗試用之、十十皆中、真良医也。雖古人不是過也。雖軒岐複生、不廢此書也。然先生有序、序已行藏言、幼年已有『直格』、『宣明』、『原病式』三書。雖義精慤、猶有不尽聖理處。今是書也復出、與前三書相為表裏、非日後之医者龜鏡歟。至如平昔不治医書者得之、隨例驗証、度已処藥、則思亦過半矣。予謂是書、雖在農夫、工販、緇衣、黃冠、儒宗、人人家置一本可也。若已有病、尋閱病源、不至乱投湯剂、況医家者流者哉。惜哉、先生卒、書不世伝、使先生之道、竊入小人口、以為己書者有之。予憫先生道、屏翳於茆茨荆棘中、故存心精較、今数年矣。命工鏤版、擬広世伝、使先生之道、出於茆茨荆棘中、亦起世膏肓之一端也。歲辛亥正月望日、大鹵楊威序」楊威「素問病機氣宜保命集序」（孫洽熙編校（1998）、pp.386-7）
- 12 前注 11 参照。
- 13 『本草綱目』卷一上、序例。
- 14 趙大震（1998）『『素問病機氣宜保命集』의 著者에 関한 考察』（碩士學位論文）、慶熙大学校大学院、大韓民国。
- 15 「其書初罕伝播、金末楊威始得其本刊行之、而題為河間劉完素所著。明初寧王權重刊、亦沿其誤、并偽撰完素序文詞、調於卷首、以附會之。至李時珍作『本草綱目』始糾其謬、而定為出於元素之手、於序例中辨之甚明。」『四庫全書總目』卷一〇四、子部、医家類二、上冊、p.869 中。
- 16 「考李濂医史、稱完素嘗病傷寒八日、頭痛脈緊、嘔逆不食、元素往候、令服某藥、完素大服其言遂愈、元素自此顯名、是其造詣深邃、足以自成一家、原不必托完素以為重、今特為改正、其偽托之序、亦並從刪削焉。」前注 15 に同じ。ただし『四庫全書』には、『保命集』が劉完素の遺書稿だと言う楊威序文は残している。
- 17 丹波元胤編『中国医籍考』（聿修堂医書選（1956））、卷五十、方論、p.654。

- 18 『保命集論類要』は、『濟生拔粹』に書題を『雲岐子保命集論類要』として収録されている。また、『濟生拔粹』の総目では、『傷寒保命集類要』に作る。
- 19 鄧鉄涛等主編（1994）『儒門事親』（『子和医集』）、卷十三、p.322；丹波元胤編（1956）、p.655。
- 20 傅再希（1981）「『素問病機氣宜保命集』的作者問題」、江西中医薬、(1)、p.59。
- 21 注 20 前掲、傅（1981）、p.60。
- 22 注 20 前掲、傅（1981）、p.60。
- 23 『医籍考』に批判的な立場としては、注 20 前掲の傅再希論文。『医籍考』に肯定的な立場のものには、李聰甫、劉炳凡（1983）「『素問病機氣宜保命集』考」、（在李聰甫、劉炳凡、『金元四大医家學術思想之研究』）、pp.2-3、北京：人民衛生出版社；鮑曉東（1991）「『素問病機氣宜保命集』的作者辨析、浙江中医学院学報、15（5）、pp.1-3；鮑曉東（1994）「『潔古家珍』問世原委窺測」、浙江中医学院学報、18（3）、pp.40 - 41 などがある。辺文靜（2011）「『素問病機氣宜保命集』作者与學術思想研究（碩士學位論文）」、河北医科大学、石家庄市、p.13 はこれら双方の主張をふまえ、後世一人の医家が劉・張両者の医学を統合して『保命集』を編んだと結論している。
- 24 杜思敬撰『濟生拔粹』（王雲五主編（1975）『四部叢刊』三編、pp.40-41）。
- 25 注 23 前掲、鮑（1994）、p.41。
- 26 「痰有五証、風、氣、熱、寒、溫也、詳見『活法機要』中。」『医学啓源』卷之上、九、主治心法、(十四) 咳嗽、pp.68-9。
- 27 注 23 前掲、鮑（1994）、p.41。
- 28 「乃今之業医者、舍本逐末、超者曰東垣、局者丹溪已矣、而最称高識者、則玉機微義是宗、若素問、若靈樞、若玄珠密語、則嗒焉茫乎而不知旨歸。」日本漢方協会學術部編（1981）『傷寒論雜病論』、p. 4、東洋學術出版社。
- 29 小曾戸洋（1989）「『玉機微義』解題」（『玉機微義』（和刻漢籍医書集成、第 5 輯）、エンタプライズ）p.9；真柳誠（1997）「『玉機微義』」（『龍谷大学大宮図書館和漢古典籍貴重書解題（自然科学之部）』）、京都・龍谷大学。
- 30 北里研究所附屬東洋医学総合研究所医史文献研究室編（1989）玉機微義（和刻漢籍医書集成、第 5 輯）、エンタプライズ。
- 31 「詳已上所言、枳殼等利氣下痰、恐非易老語也」『玉機微義』卷八、「論湿痰主嗽」
- 32 鮑曉東校注（1998）、p.12。
- 33 詳細は省略するが、『本草綱目』卷十七上「防葵」と『雲岐子保命集論類要』下「伝変諸証併方」、『本草綱目』卷四十九「鴉」と『雲岐子保命集論類要』下「小兒十二証方十二道」の記述がそれぞれ対応する。

- 34 「近世論医、有主河間劉氏者、有主易州張氏者、…（中略）…能用二家之長、而無二家之弊、則治庶幾乎。」許衡「與李才卿等論梁寬甫病症書」、『魯齋遺書』卷八
- 35 注 20 前掲、傳（1981）、p.60。